

小代ゼミ2期生 企画  
『大日本植民地帝国記念博物館』  
基本コンセプト  
(2007年7月)

\* 使用写真が、サイパンにかたよっていることを あらかじめお詫びします。2007年9月11-15日に行なった 第1回ゼミ海外研修旅行の際、小代教授が撮影したものです。将来ゼミ研修旅行で、サイパン以外の旧日本統治領に行くことがあれば、その際写真を撮ってきて 新たに公開するようにします。 またはこの企画書中に使用可能な写真をお持ちで、私たちのゼミに譲ってくださる方、ご連絡ください。

博物館開設の趣旨

かつて日本の植民地だったところには、その時代の記憶を後世に伝える博物館が必ずある。しかし、日本国内には日本の植民地支配をテーマとした博物館は皆無だ。これは何故なのだろう。戦後の日本では、米軍による大空襲や広島、長崎の原爆の記憶のみが強調され、『日本は被害者』というイメージのみが国民の中に先行しているからではないだろうか。もしくは、日本人の中に自分にとって不都合なことは隠してしまおう、忘れてしまおうとする意識があるのかもしれない。いずれにしても、戦後日本が過去の歴史を後世に伝えるという作業を怠ったことが背景にある。

歴史認識の無知が 世界と交流をしていく上で障害になっていることは確かである。そこで私たちの考える「大日本植民地帝国記念博物館」は、まずありのままの歴史を後世に伝えることを使命とする。

博物館を訪れて、見て、体験し、想像し、考え、事実を知る。そうした上で、日本人を含めた世界中の人たちとディスカッションをするきっかけを作ってもらおうと思う。そして「共有できる想い」を見つけ、平和的にかつしっかりと後世に歴史を伝えていってほしい。

この博物館の最大の特徴は、すべての国の言葉による理解を促進する環境づくりである。博物館内の表示は 多言語で表す。さらに来訪者は、入館時に言語設定のできる携帯翻訳機を借り出すことができる。さらにこの博物館は、来訪者の意見交換の場を提供する。展示室と博物館の出口付近にビデオカメラを設置し、来訪者が展示物を見終えた瞬間、率直な意見をカ

メラに向かって言ってもらおう。博物館はそれを記録保管し一般公開する。そうすることで来訪者は他の来訪者たちが何をどのように感じ、学んだかを知ることができる。またそれに対して意見を言える自由な場を設け、大日本植民地帝国が抱えた問題について訪問者たちの国を超えたディスカッションを展開していってもらおう。

## 敷地

建物のデザインに関しては保留。但し、お年寄りや障害者に配慮し、建物は1階のみにする。建物周囲の庭は次のような工夫をする。前庭の中央には南満州鉄道（満鉄）で活躍した特急アジアのレプリカ、及びサイパンの成長を支えた製糖事業を手がけた南洋興発（海の満鉄）がサトウキビ運搬に用いたSL車両のレプリカを展示したい。どちらも植民地に栄えた産業を大きく支えたものだからだ。<sup>1</sup> さらに敷地の一部に、サイパン島のミニチュアをつくり、太平洋戦争の戦禍を伝える展示とする。（第6展示室参照）なお敷地内には、日本がかつて統治した植民地の文化を紹介するようなレストラン、ギフトショップなども併設させる。それらの具体的コンセプトは未定。

## エントランス・ホール：歴史と地理

エントランス・ホールでは大日本帝国の範囲、領土拡大の歴史についての展示を行う。

戦前・戦中のアジア太平洋地域概略図を床一面に描き、当時の日本の領土の広さを実感できるようにする。壁面にはかつて日本の植民地だった南サハリン、台湾、韓国・北朝鮮、中国東北部、ミクロネシアの地図・風景写真を展示する。それぞれの土地の気候や面積などの解説もつける。当時の日本国領土は今と比べ物にならないほど広がったということを体感できるように、真冬の北海道と真夏の沖縄、真冬のサハリンと真夏のサイパンの気候・風景を再現した部屋をつくる。

さらに日本が植民地を拡張し、ついに全てを失った歴史についても説明する。すなわち1853年ペリーが浦賀に来航し、不平等条約を締結したことを発端とし明治維新が起こり、以後日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦における勝利で領土を獲得、しかし満州事変によって満州国を建設したことで世界中から反感を買い、第二次世界大戦での敗北によって全ての植民地を失う過程である。

## 第1 展示室：都市空間

植民地時代の都市空間の様子として、東武ワールドスクウェアのようなミニチュアの街を製作する。代表的都市として 1940年頃の長春と台北の街並みを通路の左右に再現する。日本が建てた官製建造物には番号札をつけ、壁面でそれぞれの単独写真を展示し解説する。特に、日本が各地に建てた重厚長大な公的建築物にスポットライトをあてる。

ジオラマを抜けた空間では、植民地都市に共通の建築デザイン・パターンをして、I 洋風 II 和洋折衷様式 III 純日本風様式の3通りを紹介する。

### I 洋風

ここでは当時の日本が、欧米列国に海外統治のアピールのための「西洋風」建物（＝近代化の象徴）を建造することで、何とか欧米に認められたいと考えていたことを説明する。また重厚な建築物は、「永久に」使い続けるという二重の目的があったことも付け加える。

### I I 和洋折衷様式

ここでは、「西洋と東洋の融合」と言う日本独特の建築物の写真を豊富に展示し、日本の植民地支配の独自性が視覚的にアピールしているかどうか（すなわち「西洋と東洋の融合」という発想は成功したかどうか）来訪者に考えて欲しい。

例えば 洋風建築に日本の城郭を付け加えた「珍奇」ともいえる外様をもつ建築物として、中国東北部に現在も残る、旧関東軍司令部（現中国共産党吉林省委員会）、旧満州国軍事部（現吉林大学第一医院）、旧満州国司法部（現吉林大学校舎）、旧満州国総合法衛（現中国人民解放軍空軍医院）などの姿を展示する。台湾では 旧高雄駅、旧高雄市役所（現高雄市立歴史博物館）など、サハリンでは、樺太庁博物館（現サハリン州郷土資料館）、などを展示する。

### III 純日本風様式

ここでは、統治者日本人が暮らしていた日本人町などの町並み、家屋を紹介する。

例えば台湾の萬榮（植民地当時は「森坂）」という集落に残る日本家屋、韓国の釜山周辺や仁川にかつてあった日本人居留地に今も残る日本家屋、現在サイパンに残る日本統治時代日本学校の教員住宅であった日本家屋の写真など。植民地に住む一般の日本人の暮らしは本国と大して違わなかったことを説明する。

I から III の展示を通して、日本の意図とは、被支配地域の純粋な日本化をはかるものでなく、『「西洋化された日本」化』だったという点を強調し、一方で植民地に住む支配者日本人は自らの生活様式を純粋に西洋化することはせず（できず）、日本風を守ったという矛盾も指摘する。そしてそういった支配者の姿が、被支配者の人々の目にどう映ったか、訪問者に考えてもらおう。また、日本統治時代に建てられた建築物が現在も残されていることに関して、戦後各地が独立した後も、使えるものは使おうとする合理的発想や、歴史的遺物として保存する目的などが背景にあることも説明し、日本統治時代の建築物が全て破壊されているわけではないことも説明する。

#### 参考写真

サイパンに残る日本風家屋。日本統治時代は おそらく日本人教員住宅だった。現在は、日本人の血をひく女性が住む。



## 第2展示室：神社

### 通路の工夫

神社を見たことも聞いたこともない国の人のために、狛犬、手水舎、神馬、灯籠などを通路両側に展示する。参拝の作法なども載せておく。第2展示室の手前には廊下の天井と幅ぎりぎりに作った鳥居のレプリカを設置。さらに日本国内における神道の成立～国家神道・社格制度が成立するまでの流れを簡単に説明し、社格制度の内容・目的にも言及する。

### 参考写真

サイパンの「八幡神社」に今も残る狛犬。



### 展示室

植民地に建てられた3種類の神社について説明し、写真を展示する。

I. 日本国が建設・管理した神社。 権太神社、台湾神社、朝鮮神宮、関東神社、(満州)、南洋神社 (ミクロネシア) など。

II. 民間によって運営されていた神社。 豊原神社（サハリン）、弥栄神社（満州）、NKKK神社（ミクロネシア）など。

III. 戦没者を祀るための招魂社（護国神社）。樺太護国神社、台湾護国神社など。

いずれのタイプにしても 植民地に建立された神社は日本人の自身の生活の安定を願い建てたか、「皇民化政策」の一環として建てたものであることを説明し、共にあくまでも「日本人」のためでしかなかったこと、そして植民地の人々にとっては支配と反発の象徴であったことを伝える。

次に植民地が崩壊した後の神社の運命を展示する。 戦後、植民地に建立された神社は様々な運命をたどった。 破壊されるもの（韓国に残る神社跡）、放置されたまま朽ちていくもの（サハリン各地に残る鳥居）、歴史を直視するという意味で保存されるもの（台湾の桃園神社）、敢えて日本の神社を加工することで日本統治が終焉したことを記念するもの（台湾の高雄神社）、慰霊目的で再建されたペリリュー神社（南興神社）、などがあることを紹介する。 いずれにしても、旧植民地には 今日も日本が建てた神社が残っており、それによって日本統治の事実が 今日海外の風景に残っている現在を考えてもらう。

### 参考写真

上： サイパンの マウント・カーメル・カソリック教会敷地内の墓地に  
今も残る鳥居。 白く塗り替えられている。

下： サイパンに残る八幡神社。





### 第3 展示室：産業と経済発展

植民地時代、物資生産のため各地に工場が建てられた。それにつれて各植民地ではインフラ整備が行なわれ、「近代化」が持ち込まれていった。そのような工場、インフラは、終戦後の発展基盤となったものもあり、現在でも残っているものもある。逆に戦後破壊された工場、インフラもある。日本の支配が植民地に作り出した近代化の風景を紹介する。

写真展示するものは、サハリンに今も残る旧王子製紙真岡工場と、発電施設、台湾の宜蘭酒廠、各地で現役で活躍する日本統治時代に立てられた駅舎、韓国南部の町統営に残る歩行者用の海底トンネル、など。ここでは、植民地支配が終了した後も、旧統治国のもので使えるものは接收し使い続けている事実を理解する。

#### I. 植民地都市の繁栄の光と陰：1930年代の京城

ここでは植民地支配・侵略のココロである開発、近代化「させる」ことについて考えてもらう。

当時植民地で行われた開発は現地の人々にとって何を意味したのか。そして日本が持ち込んだ「近代化」は現地の人にとって何を意味していたのだろうか。日本の企業、技術の進出は、あくまで日本のための発展である。「侵略者」に与えられた、というより勝手に持ち込まれた技術とは、仮に現地の人々の生活を豊かにするとはいえ、いや豊かにするからこそ、存在するだけで現地の人々に対する心



理的な圧迫感があるのでないか。例えば日本経営の工場では、日本人よりはるかに低賃金で働かされたりしたわけだし、現地の環境への悪影響もあったはずだ。

ところで、経済発展の過程で、支配者が持ち込んだ近代的娯楽や消費文化を。現地の人が「享受」するとき、現地の人々は、どのように感じたのだろうか。

こうした問いを考えてもらうのが 『1930年代の京城（植民地朝鮮の首都）』の都市の様子とライフスタイルを紹介するコーナーである。当時の京城は一見華やかだった。東京並みのモダンガール、モダンボーイがアスファルト道路を闊歩し、「ヤンキー文化の輸入代理店」と揶揄された三越や、丁子屋などのデパートのショーウィンドウは豪華絢爛で、映画館では、アメリカやフランスのアクションやロマンス映画が上映される。日本が作った近代式公園では、春は夜桜見物、夏は花火大会が催され、ダンスホールでは、蓄音機のかなでる音楽にあわせて男女が抱き合って踊る。京城運動場では、日本の早大サッカー団と、朝鮮人サッカー団との試合が人気で、冬になると若い女性は男性と待ち合わせてスケート場に行く。

当時の朝鮮の人々は、日本による支配が持ち込んだこうした娯楽と消費文化を心から楽しめたらうか。またはこうした娯楽を享受しながら、ふと日本によって搾取されている自国を思い出すとき、それはどういう感覚だったのだろうか。

「物質的にきらびやかな植民地支配」という側面に、21世紀の今も、世界のあちこちに同じような場面が展開されている都市生活のからくりが重なるかもしれない。1930年代の京城の繁栄を再現した展示に、今日的な意味をも見つけてほしい。

## 第4展示室：日本語教育と皇民化教育

### I. 日本語の普及

かつての植民地に住み 今も日本語を話せる人が、植民地時代の思い出、辛かったこと、よかったこと、戦争観、当時の日本に対して思ったこと、現在の日本人に対して思ったことを語る映像を見せる。上映室は、サハリン、台湾、韓国・北朝鮮、中国、ミクロネシア、と植民地別に分ける。または、個人ブースを設置して、スクリーンを操作してどの国の誰の話しを聞くかを選べる機械を置く。話し手には サハリンにすむ朝鮮系の人たち、台湾のパイワン族、タイヤル族、ヤミ族の人たちなども加え、被支配民族の多様性に留意する。彼らの日本語があまりに流暢だった場合、聞き手は違和感を感じるかもしれず、上手になった背景にあった理由 — 日本語が上手いと出世できる、下手では処罰される、等



など ― に思いをはせてほしい。

## I I . 皇民化教育

韓国の『教育博物館』にならった展示をする。『教育博物館』の第二展示室にある日本語の「書き方手本」の教科書、「臣民の道」という公民化教育用のテキスト、日本人教師によって使われていた刀を再現し展示する。また、『教育博物館』内の教室を再現した展示コーナー同様、当時使用されていた教室をまるごと再現する。その他、皆勤賞の賞状も教室の一角に展示する。再現された教室の窓からは『皇国臣民誓詞之柱』（この碑の前で「私は大日本帝国の臣民です」と唱えさせられた）が横倒しになっているのが見えるような視覚効果を考える。さらに現在の韓国では実際にこの碑が横倒しになっているところがあるという事実を説明する。また各地に作られていた奉安殿や奉安庫も再現する。そして皇民化教育を受けた人々に、当時日本語を学ばされ臣民として教育を受けさせられたことに対する当時の考え方や、現在の思いについてインタビューした映像データを見られるようなブースを設ける。

### 参考写真



サイパンの マナムコ・シニア・センターにて、日本統治時代の話しをするおばあさん。

## 第5展示室：闇

広島にある原爆ドームや長崎にある平和記念公園では、日本は戦争の被害者とい

う印象がある。この展示室では日本が植民地にて犯してきた非人道的な行為を取り上げ、日本が加害者であったという過去を認識する。ここでは、満州で日本陸軍の石井四郎が組織した特殊部隊731部隊が行った犯罪について取り上げる。表向きではワクチンの開発を目的とするコレラ、ペスト、チフス等の研究と安全な飲み水の研究であったが、実際には細菌兵器の開発に伴う人体実験を行っていた。

教科書等を見てもほとんど記述がない「生の人体実験」。ナチスによるユダヤ大量虐殺に使用されたアウシュビッツ収容所とどこかイメージが重なる、731部隊の実験施設の写真を紹介する。実際に人体実験がおこなわれた研究室のレプリカを作り、来訪者はそこに入り、実際に行なわれていた実験を疑似体験する。日本兵からみた犠牲者となった人々の在り方の説明以外、文字は使わない。

展示ではまず、「心臓が弱い人は入ってはいけない、また、気分を害する恐れもある」という注意書きを展示室の前に張っておく。中はただの真っ白な部屋にし、来訪者は専用のゴーグルのようなものをかけて、ビジュアルな世界で実際に『マルタ（生体実験の材料となる人々の名称）』を使ったさまざまな人体実験の様子を体験する。実験内容ごとに、銃殺部屋、凍傷部屋、解剖部屋、火炎放射部屋の4つに部屋を作り、それぞれに見合う部屋の大きさ、環境を再現する。

人体実験がおこなわれる日まで「マルタ」とされた人々が生活していた部屋なども再現し、彼らが食べていた食事なども置いてみる。人々が着ていた衣服が制服だった場合、試着コーナーも設けたい。彼らを運んだ車両を展示し、来訪者が実際に乗車できるようにする。施設は証拠隠滅のために爆破されたので、本物の施設通りの再現は困難であろうが、元隊員の言葉から本物に近いものに再現する努力をする。

## 第6展示室：戦争

### I. サイパンの戦場跡

現在のサイパンの全島のミニチュアを再現する。よって展示室は室外である。ここでは2007年9月11日から15日に小代ゼミ研修旅行で見聞きしてきた内容を全展示する。ミニチュアに再現されているポイントは、南興神社、海に沈んだ戦車、米軍上陸地点、空港周辺の旧日本軍弾薬庫、スーサイド・クリフ、バンザイ・クリフ、ラスト・コマンド、海軍司令部跡、極楽谷野戦病院跡など。（詳細は、ゼミ紹介ページ『2007年ゼミサイパン研修報告』へ。）

## II. サハリンの石碑

サハリンにある「戦勝記念碑」と「鎮魂碑」、そして「日ソ平和友好の碑」の碑のレプリカを展示する。同時に、幕末から日露戦争、そして第二次大戦までのサハリンの簡単な歴史とそれにともなっていた碑の歴史もわかりやすく説明する。ここでは、現在サハリンに残されている石碑に現われた歴史観について考えてもらいたい。日本が日露戦争に勝った時の戦勝碑は、ロシア軍や現地の人に壊され、今はどこにあるのかも分からなくなっていることに注目したい。また日本の領土だった南樺太を確定する旧国境を表すものは、ロシアのモニュメントにしかなく、日本による「国境標」という標石が確認できないことにも留意する。それは第二次世界大戦の戦勝国ソ連に壊されてしまったのだろう。戦争は勝った者が正義で、負けたほうはどういう内容で負けようが、悲惨な歴史を綴っていくしか道は無い。現在のサハリンの若者は、昔日本に統治されていたことを知っているのか？ いや、日本側にもそういった隠された過去はあるではないか、と考えを深めていってもらいたいことが狙いである。

### 第7展示室：日本の食べもの、遊び

ミクロネシアなどに今も残る、チャンバラやビー玉、じゃんけんなどの日本の遊びについて触れる。

また食文化の視点からみると、統治時代に持ち込まれた日本食を現地の人々の口に合うように加工している場合もある。台湾の、おでん、アゲ、天ぷら、韓国ののり巻き、タクアン、おでん、うどん、ミクロネシアのおにぎり、焼き魚、ソーメン、などなど。なぜ日本文化がこのような場所で今尚生き続けているのか。取捨選択可能であった戦後でさえ生きつづけているという事を認識して、強制力のなくなった戦後も日本文化を再評価したためなのか、を考えたい。

### 出口付近

出口付近にビデオカメラを設置し、来訪者が展示物を見終えた瞬間、率直な意見をカメラに向かって言ってもらおう。具体的な質問として「あなたがこの博物館

に足を運ぶ前の日本・日本像はどのようなものであったか。この博物館内で得た日本・日本人像はどのようなものか。運ぶ前と運んだ後では日本・日本兵像はどのように変化したか」 などがある。この映像は一般公開される。

## VTR 上映ホール

### I. エントランス

大ホールに入る前に設置されたホール。ここでは、神社強制参拝が植民地の人々をどれほど険悪な気持ちにさせたかを考えてもらう。当時の強制参拝の様子を伝える10分程度のVTRを上映するが、その際まず旧日本軍兵に扮した博物館スタッフが室内に突然現れ、扉を閉めて出られないようにする。出口付近に、『自分の意思に関係なく何かを強制されるということを あなたはどう感じましたか?』という看板を設置して、来訪者に考えてもらう。

### II. 小ホール

来訪者が、博物館入口と出口付近に設置したビデオカメラに向かって意見をのべる様子を編集した映像を上映する。

### III. 大ホール

植民地統治に関連した映画（フィクション、ノンフィクション、ドキュメンタリーなどあらゆるジャンルのもので、制作された国は問わない）を常時上映する。

## 最後に：博物館企画者のことば

多くの関係者が博物館建設発案から反対していた。それは、今までに日本国内には植民地時代における日本像を中心とした博物館がなかったためである。最近の調査では、愛国心があると答えた人々は78%にのぼり、またその中の85%は植民地支配に対して反省をする必要があると答えている。（大沼保昭「私の視点」『朝日新聞』2007年2月12日掲載による）しかし多くの日本人は 奴隷売買、

ナチス軍によるユダヤ人大量虐殺などの世界的悲劇といえる出来事などは良く知っていても、日本人がおこなった植民地政策の詳細を未だ知らない。

現在経済大国として存在している日本。日本文化は多くの国々に評価されている。そこには華やかな日本像がある。しかしその華やかな日本文化の裏にはこのような歴史的背景があったのだ。当博物館では、日本人が知らないのではないかという過去を展示し、来訪者に「知らない過去がある」という事を認識していただこうと考えた。「知らない過去」があるということを理解し、またそこから新しい理解へと繋げる努力をしていただけたらどうか。

外国からの来訪者の方には、自国の戦争、自国による他者の支配についても考察してほしい。日本の植民地統治内容から新しいものを発見することもできるのではないか。

---